

---

# 神を呼ぶポケモン

砂漠の蜻蛉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神を呼ぶポケモン

### 【Nコード】

N4975I

### 【作者名】

砂漠の蜻蛉

### 【あらすじ】

昔、この地を破壊しつくした神のポケモンが今よみがえった。用心棒ルークの物語がいま始まる。

## 登場人物（前書き）

はじめまして砂漠の蜻蛉です。

初めての作品なので色々とおかしな所があるかもしれませんが。

その時はこっそり感想にして送ってください。

## 登場人物

### 登場人物

#### ルーク

色違いのフライゴン 主人公 用心棒をしながら色々な国を旅している

#### ランク

リオル ガレン王国の王子

#### シグラ

ボーマンダ 木の実や薬草に詳しいルークの友人

#### サガル師

キュウコン 色々なことを知っているが、放浪癖がある

#### ハラシ

ヨルノズク ランクの教育をしていた

#### ガル

ボスゴドラ ガレンの將軍 力が強く頭がいい まさに將軍になるために生まれてきたよう

#### レス

デイグダ 便利屋で街については知らないことがないらしい

#### サラ

サンド レスの妹的な存在

アル

グラエナ 猟犬のリーダー

用語集

サン

時間の単位 1サンは約1時間

カル

木の実の粉を練って焼いたお菓子 木の实によって味が変わる  
クッキーのようなもの

登場人物（後書き）

だんだん更新しく予定です。

## 序章 謎の夢

雨が降る寒い夜だった。

その時見た夢は今でも覚えている。

何か語りかけてくるが何を言っているのか分からない。

この夢を見はじめたのはめたのは夏になってからだ。すでに4回も見ている。

感はいい方だったがこの先まさかあんなことが起きるとは予想できるものではなかった。

## 1話 流れ者のフライゴン

ルークは、橋を渡っていた。上流には王族の橋があり王族の行列が割ったて行るのが見える。

金色の飾りが西日で光り輝いている。

ルークは立ち止まってその景色を見つめた。

ルークはこの国の出ではないので王族にはなんの義理もないが、その美しさについて足をとめてしまっていた。

ルークを見る人はたいてい青いつのを見てしまうだろう。

それに飛んで移動するより歩いていくことが好きな少し変わっている用心棒をしているフライゴンだ。

「ん？」

普通のポケモンならおそらく分からなかっただろう、しかしルークにはその違和感がすぐに分かった。

橋の裏にある山から王族に向けて銀色に光るものが飛んでくるのをそれを見たときルークはすでに橋げたを乗り越え王族に向かって飛んでいた。

「（間に合え）ドラゴンクロー！」

グサツ！

橋に鋼の翼が突き刺さっていた。

だがその衝撃で人影がかわにおちてしまった。

幸い木にひっかていたためすぐに拾い上げて岸まで運んだ。

（王子じゃないかまさかしんでないよな……。よかった脈はあるな。）  
少し遅れて王族の医師が来たため無事に旅に戻ることができた。

夜、ルークのところに手紙が来た。

お礼で終わりだろうと思っていたルーク驚いたが手紙の内容にはもつと驚かされた。

その内容は王宮に来てほしいという妃からの招待状だった。

「（妃がなぜ？）」

疑問には思ったが断るわけにはいかない。ルークはすぐに王宮に向かった。

## 1話 流れ者のフライゴン（後書き）

次回、ルークの身に何が起こるのか！

ちなみにあの夢を見たのはルークではありませんよ。

## 2話 旅の始まり

ルークは目の前の料理を食べ終えた。

(「何でこんなことになったんだっけ」)

王宮についたルークはとても丁重にされた。

普通、ルークのような者は王宮にさえ入れない  
つまりルークは大切なお客様な訳だ。

「ご満足いただけましたか？」

「ええ私にほもつたいないくらいです。それより泊ってかないとい  
けないんですか？」

「はい、でないと私が怒られてしまいます。」

「(まあ泊っていけと言っているんだから泊って行くことにする  
か。それにこんなこともう二度とないだろうしな……。)」

そのあとルークは寝室に案内された。

王宮はどこもかしこもピカピカで最高級な物ばかりだった。

「(こんなところに毎日いたら飽きるだろうな……。)」

そんなこと事を考えながらルークは眠った。

1サンほどたったころ足音で目が覚めた。  
音をたてないようになっているようだがばればれだ。  
足音が部屋の前まで来たとき声がした。

「ルーク入るぞ。」

妃の声だ。

「どつぞ」

そう答えると、妃は昼間助けたりオルを連れて入ってきた。

「ルークよ。お前を見込んで頼みがある。」

「（やっぱりそんな事だろうと思ってた。ただでこんなとこ止めて  
くれないよな）」

私にできることなら・・・。」

### 3話 妃の願い（前書き）

王宮に呼び出されたルークその意味とは

### 3話 妃の願い

「お前を見込んで話がある。この子を連れて逃げてほしいのだ。」

「えっ！」

つい声が出てしまった。

「（王子を連れけ逃げてくれなんて言う人がいるか。それともきでもくるってる？）」

王妃はそんなこと脇にしてないらしく話を進めた。

「いまこの国が戦を行っているのは知っているな。」

そんなことはもちろん知っているがそれがどう結びつくのかはまったく分からない。

「その相手の国王がこの子を狙っているのだ。」

「隣国の王がその子を人質にしようとしているのですか？」

「いいや、違うこの子を武器として使おうとしているのだ。」

ますます訳が分からない。

「おぬしはこの国に伝わる伝説を知っているか。」

「ええ、一応。」

この国の伝説はあるポケモンが神のポケモンを呼び出してこの地を滅ぼしたという話だ。

「ならば話が早いこの子はその神のポケモンを呼び出す力があるのだ。

それを狙っているのだろう。」

やっと話が分かったつまりその王から守ってほしいってわけだ。

「しかし、それならここにいた方が安全なのは……。」

「だめだ ここにはすでに裏切り者がいた。頼れるのは おぬしだけだ

神速のルークのうわさはこの国にも入ってきている。だから……。」

「

王妃は泣きそうになっている。

「……分かりました……。」

ルークはこういう雰囲気は苦手だったし何よりはじめからこの仕事を受けるつもりだった。

「しかし、必ず守りきれるとは約束できませんよ。」

妃はうなずいた。

ルークは荷物から青く光る飾りをつけて言った。

「ではここから安全に逃げられる道を教えてください。」

3話 妃の願い（後書き）

いよいよ旅立ち。

これからどうなるのか・・・。

#### 4話 便利屋（前書き）

久しぶりー（といっても1週間ぐらいですが）の投稿です。  
家のパソコンの調子が悪くて大変でした。  
でももう大丈夫です。

## 4話 便利屋

ここは敵国 シュロの王宮

「ガレンからの言伝です。」

「読んでみよ。」

「はい、妃は用心棒をしているフライゴンを王宮に招いたようです。おそらく……。」

「わかっているそいつに王子を託したと言いたいのだろう。」

「では……。」

「ああ、アルよ、猟犬を連れて王子をおえ。その用心棒は殺してもかまわん。」

その頃ルークたちは街へ向かっていた。

「（大泣きするかと思っていたが、案外静かで助かった。この子は何となく私に似ているな。）

あ、そういえば名前をまだ聞いて無かったな私はルークと言っんだ。

「

「・・・われは、ランクと言う。」

「ふーんランクね。いい名前じゃないかでもその言葉使いは何と  
かしないといけないな。」

「この後どうするのじゃ。」

「とりあえず街へ行こうと思っている、まあ最終的には山にでも隠  
れてるがな。」

「その翼は？」

「ああこれはエアームドの攻撃があたってたみたいだな。しばらく  
すれば治るさ。」

そんな話を話しながら半サンほど行くと 木に布をかぶせただけの  
ような家？についた。

ルークはさつと中に入って誰かと話していたが、しばらくすると手  
招きをして中に招き入れた。

中は外から見たのと同じような感じだった。

「ランク、今夜はここで寝る。」

「(えっこんなところで)」

「寒いからサツサと寝ろよ。」

そういうとルークは寝てしまった。

「（こんなところで 寝れるわけないよ。）」

そう思っていたのだが、ついに睡魔に負けてしまった。

ルークの話声で目が覚めたのぞいてみるとデイグダと話しているのが見えた。

何を言っているのかはここからじゃ分からない。

「おはよう」

「うわっ」

突然後ろから声をかけられたため変な声を出してしまった。

「ごめんなさい！脅かすつもりはなかったの 許して。」

声の主は女の子のサンドだった。

「おやつと起きたか、ほら朝食だよ。」

ルークが渡したものは青い色をしたカルだった。食べてみると口いっぱいに渋みが伝わってきた。

「はは、目がは覚めただろ。それはシーヤの実のカルだ。」

シーヤの実と言えば木の実の中でもかなり渋い方に入る木の実だ。

「ランク、この二人は便利屋のデイグダ、レスと、サンドの、サラ

だ。  
「

「よろしく。」

「この二人には買い物頼んであるんだ。」

そういつことじゃあ行ってきますよ、ルーク兄さん。」

そういつと二人はでて行った。

#### 4話 便利屋（後書き）

次回から、ゲストとしてルークさん呼びたいと思います。

ルーク「読んだか。」

なんているの

ルーク「いやーちょっと暇だったから。」

そんなこと言ってる場合じゃないでしょもうすぐ出番が来ちゃうよ  
ルーク「そうなの。」

そうなの、というわけで早めに来てしまいました。が次回からお楽しみに。

## 5話 獵犬

1サンほどたった頃 二人が帰ってきた。

「買ってきましたよー!。」

「早かったな。」

「もちろんですよ。この街で知らないことなんてありませんよ。

それよりもルーク兄さん 軍隊が出動するようですよ。」

「なんでだ いま戦争はにらみ合いみたいな状態なんじゃないのか?。」

「なんでも王子様がいなくなったそうなんです。」

「(なんでだ妃は王にこのことを伝えなかったのか)。」

「ルーク兄さん!。」

「ああ、すまない、ちょっと考え事をしていたもんで」

「グラエナがルーク兄さんのことを探してましたよ。」

追いかけては来ないと思うけど一応サラに外で見張っててもらってます。」

「そうか (もう追手が来ているのか 急がないと)。」

「ルーク兄さん？」

「レスすまないこれで早くこの街から離れるんだ。ここにいたら殺されてしまうかもしれない」

そういうと財布から金貨を取り出した。

「そんな…ルーク兄さん」

「お願いだ、二人には死んでほしくない。」

夜、ルークたちは街の路地裏にいた。

「気をつけて下さいよ」「気をくけて」

「ありがとう、すまないこんなことに巻き込んでしまった。」

「いいんですよ、あんな家よりもっといいところを見つけますよ。」

「そうか・・・気をつけるよ。」

「わかっていますって。」

そういうと二人は街の明かりに消えて行った。

「つけられてるな。」

「え！」

「あまりキヨロキヨロするなよ。　（しかもう気づかれるとは1、2、3、4人が、多いな。」

それにもうすぐ畑に出る襲うならそこか。」

ついに畑に出た。満月で影ができるほど明るい。

畑を横切る道の真ん中に来た時、後ろから鋭い殺気を感じた。

「ランク！あの森まで走れ！」

二人は目の前の森へ走りだした。

## 5話 獵犬（後書き）

前回の発表どうりるーくさんにきてもらいましたー。

ルーク「どうもこんにちは 人によってはこんばんはかな？ルークです。」

では質問をしたいと思います。

ルークさんには彼女がいるんですか？

ルーク「えっこれって話に関係ないの？」

はい

ルーク「私にはそんな風に呼べる人はいない。」

じゃあ彼女募集中という感じで。

ルーク「ドラゴンクロー」

しばらくお待ちください。

ルーク「私にそんなものは必要ない。」

ずいません。というような感じでまだまだ続きます。

ルーク「これってまたやるのか・・・。」

6話 追われて(前書き)

いよいよルークの本領発揮!

## 6話 追われて

ルークは、4匹のグラエナに囲まれていた。

「（はあ、はあ、くそ挑発なんてしなきゃよかった。）」

もうかれこれ半サンも攻撃されては避けるの繰り返しだった。いままでいくつもの困難を切り抜けていったルークでもきつかった。

「噛み砕く！」

集中が途切れた時、グラエナの攻撃が右肩に当たった。

「ぐっ、ドラゴンクロー！」

とっさにドラゴンクローでグラエナを弾き飛ばした。

「火炎放射！」

その攻撃で、グラエナたちは気絶した。

それを確認してから ルークはランクが待つ森へ走って行った。そのあと姉が降り始めた。

二人は守りを進んでいた。

「(やばいな・・・肩の傷が思ったよりひどい 出血もしているいつまでもつか・・・。)」

「ルーク大丈夫か？」

「いいと・・・思うか。まさか守るべき相手に守られるとは。」

不意にひどいめまいがして倒れてしまった。

「うっ！」

「ルーク！」

「(体に力がひらない 目がかすんできた・・・。ランクだけでも助けないと。)」

ランクは心配そうにルークを見ている。

「ランク・・・よく聞け・・・この先に・・・シグラってやつがいる・・・そいつに助けを・・・。」

それ以上しゃべれなかった。

「ルーク！」

ルークをゆすつたりしてみたが全然反応がなかった。  
ランクは意を決めた。

「この先のシグラだね待ってて。」

ランクは森の中へ走って行った。

## 6話 追われて（後書き）

ルーク「ちょっと私が死にそうじゃないか。どういうことなんだ。まあまだこの先があるんだからちょっと待っててよ。」

あ、でももうすぐテストだからそれが終わった後に次の話をルーク「なんだよそれ！」

## 7話 それぞれの思い（前書き）

来週更新とか言ってたけど今日更新しちゃいます。

ルーク「そういえばテストはどうだったの」

聞かないで・・・。

## 7話 それぞれの思い

二日前 ガレン王国王宮

そこに一人のヨルノズクがいた

「なぜ私ではなく 異国の それも各国を放浪している

フライゴンなんかに王子を渡してしまったのだ。 なぜ・・・。」

さつきから一人でブツブツ言っている彼女の名前はハラン、

ランクに政を教まじえていた いわば先生だ。

さつき王妃に王子を逃がしたことを聞いたもだった。

「なぜ・・・。」

「ハラン殿。どうかされましたか？」

突然話しかけられたため持つていた本を足の上に落してしまった。

「いった！」

「これはすみません。大丈夫ですか？」

さつきから話しかけてきているのはボスゴドラ

名前はガルこの国の軍隊の司令官 つまり將軍だ。

こんな性格だが頭がよく他人思いで部下からの評判はいい。

「浮かない顔をしていますか？」

「ああ、あなたには話しておかねば。」

そう言うときさつき妃から聞いた話をガルに話した。

聞き終わった後ガルは少し考え事をしていた。

「つまりそのフライゴンを見つけ出し手助けをしてくれというのが

妃の頼みなのだな。」

「そうです。」

「ではそのフライゴンが見つかるのは時間の問題ですな。」

「なぜ？」

「もう搜索している。もちろんどんなわけかは知らなかったが。」

「そのフライゴンを絶対に殺めてはいけない彼はこの国をすっく

てくれるかもしれないのだから。」

「分かっていきますよ 明日から私も捜索に加わるつもりです。あなたはなにを・・・」

「私はこの国の伝説に付いてもっと調べてみます。もしかしたら役に立つかもしれない。」

そういうとハランは記録ノ間へ向かっていった。

「まったく。ハラン殿は。」

「ゴホツゴホツ」

記録ノ間には数多くの書物がほこりをかぶりながら眠っていた。

「まさかこんなにあるなんて思ってもみなかったわ。解読するのに何日もかかってしまう。」

ううんそんなこと言ってられない、早くこの本を解読しなければ。

「  
だが、ここにある書物の大半は古代ガレン語で書かれているため解読は全く進まなかった。」

そのころガルはルークを探し出すために旅立っていた。

「（私が何とかしなければ 解読ができたとしても王子がいなければ意味がないのだから。）」

その思いから自然と速足に待っていく。

この二人がルークたちに会うのはまだ先のことであった。

7話 それぞれの思い（後書き）

ルーク「おい」

はい？

「この話はなんだ」

なんだって……。

「私のことを楽しみにしていた読者だったはずだろ」

……まあその辺は次の話ってことで

## 8話 薬草師シグラ

暗くなにもないところにルークはいた。

「（ああ、これが 死ぬ ってやつなのかな。）」

そんなことを思いながらどんだん闇の中へ引きずり込まれていく。

「ルーク」

「（誰だ。）」

「お前には、まだやることがあるだろう」

「（そうだ私にはまだやることもあるんだ。ランクが待っている。

こんなところにはいられない。」

「ルーク こっちに戻ってこい。」

ルークは声に導かれるように 上へのぼって行った。

「う・・・うつん ここは・・・どこだ？」

周りには薬のつぼが乗っている見覚えのある棚があった。

「それにこの匂いどこかで・・・。」

「やっと起きたか 二日間も寝てたんだからな。」

「この声 シグラか？」

「そうだ 起きられるか？」

そういうとシグラは背中を押ししてくれた。

起き上がるとそこには心配そうにルークを見ているボーマンダの姿があった。

「あの子に感謝しろよ 俺を呼びにこなかったら今頃冷たくなつてたぞ。」

傷の具合はどうだ？」

「傷？・・・そうだ！ランクは名の子は無事なのか！」

シグラは巻いてある包帯をほどきながら言った。

「大丈夫。どつかの誰かさんみたいに無茶はしてないから。それにしても、お前本当にフライゴンなのか傷がもう塞がってる。」

「そうか よかった。」

「よくない。まだとてもじゃないが動ける状態じゃない。まあとりあえず夕餉にでもしよう。」

「そういえば 腹が減っていたっけ。」

「じゃあそうするよ。」

その時 ランクが部屋に入ってきた。

「ルーク！よかった気がついたんだね。」

「ランク！」

「よかった 死んじゃうんじゃないかって思っていたぞ。」

「すまなかつたな。」

「なあ、感動の再会は食事の後にしないか？」

「そうだな、そうするか。」

シグラが作っていたのは木の実スープだった。目がさめた時にしていた匂いはこの匂いだった。

「おいしい。」

「あいかかわらず、こうゆうのは得意なんだな。戦いはまるっきりにくせに。」

「いいだろ、そんなことできなくても生きてけるんだから。」

この言葉からも分かるようにシグラはポーマンドなのにとっても優しい心の持ち主だ。

だからこんな人気のない森の中で木の実を取りながら一人で暮らしている。街に行くのは薬を売りに行く時だけだ。

本人いわく「人を怖がらせないため」だそうだ。

「そうだ、シグラ サガル師は今どこにいるんだ？」

サガル師というのはシグラの師匠だ。シグラは薬草師の反面、まじない師でもあるそれをサガル師に教えてもらっているのだ。

「さあ、師は今旅に行つててどこにいるのやら。」

その時、突然入口が開き一人のキュウゴンが入ってきた。

「えっサガル師？なんでここに」

「この人が……。」

キュウゴンは驚くランクの顔をの除き込んだ。

こんな近くで他人の顔なんか見たこと無いので気分が悪くなってきた。

「ルーク……。」

「ルーク？」

キュウゴンはルークの方を見ながら言った。

「やっぱりまたお前か 面倒事を持ち込んできおつて。」

「面倒事じゃなくて『仕事』です。」

「同じじゃ。特にこの子の場合は下手をすれば国の一つや二つ簡単に消してしまつぞ。」

その言葉にランクは啞然とした。

## 8話 薬草師シグラ（後書き）

ルーク「シグラの料理はこの世で一番うまいぞ。」

それはそれは一度食べてみたいですね。

ルーク「いまはないが、私のカルならあるぞ。」  
「  
要りません。」

## 9話 伝説

「この話はお前にとってはひどい話じゃが聞くか？」

ランクはうなずいた。もう覚悟はできている。

サガル師の話は信じられないその話の根拠を知りたかった。

「じゃあはじめとするか。」

ずつと昔、4000年以上前の話だ。

この地は国も何もない土地だった。ただ各地に小さな村がありそこで平和に暮らしていた。

だがある時強大な力を持った国が攻め込んできた。

一つの村だけではとてまかなわずその地は国に飲み込まれていった。その中で一人のルカリオが立ちあがった。

彼は神の力としてあがめられていたポケモンを使い、敵を滅ぼした。そして彼は王としてこの地に『ガレン』という国を築き上げたのだった。

「この話が何だというのだ。この話はガレン王国の者ならだれでも

知っている話だ。」

確かにこの話はガレン王国が誕生する時の伝説だ。王子のランクが知らないはずない。

「確かにこの話は『王族』に伝わっている話じゃ。じゃがその話はぬけているところがあるのじゃ。」

そのルカリオは確かにその力を使ったがそのあとその力を暴走させて死んでしまった。」

「死んだ？」

「そう、その暴走を止めるために殺されたのだ。それが王族の先祖と言っわけじゃ。」

「そんな・・・。」

そこまで聞いていたシグラはどなった。

「師匠それは言い過ぎです！」

「いいのだシグラ。気分が悪いから外に出ている。」

そういうとランクは外へ出て行った。

「待つ」

シグラは追っついていこうとしたがルークに止められた。

「いまはそっとしておくのが一番だ。」

しばらくしてからランクは戻ってきた。

「覚悟はできたか。」

ルークは聞いた。

ランクはゆっくりうなずいた。

「よし！ シグラ、今年も山に行くんだろ。」

「ああ 行くがそれがどうした？」

「私たちも連れて行ってくれ。ランクいいな。」

「いいけど どうして?」

「もちろんお前を守るためだ。」

## 9話 伝説（後書き）

なんかうまく書けなくて変なところがおおくてすいません。

ルーク「本当になんとお詫びをしたらいいか」

なんであなたまで謝ってるんですか。

ルーク「何んとなくだ それより人気投票はどんなんだ？」

それが一票も入ってなくて。

ルーク「それって宣伝してないからじゃ・・・。」

そうか！第一回人気投票実施中なので票を入れてください！！

詳しくは『砂漠に執務室』を見てください！

おねがいます。

## 10話 旅立ちの準備(前書き)

前回のグダグダをここで立ちなおさせるぞー！  
ルーク「・・・オー。」

## 10話 旅立ちの準備

シグラの冬の山小屋へ行くことになり準備に明け暮れる日が続いた。サガル師は『伝説どつりにならない方法を探しに行く。』と言ってすぐに旅立ってしまった。

ルークは『サガル師は、あんなふうだけど必ず救う方法を見つけてくれる。あれは照れ隠しなんだから。』とは言っていたけど。

「ランク、こつちを手伝ってくれ。」

「うん今行く。」

ルークは街へ買い出しに行っている。

街では王子誘拐のうわさが立っているが

『うわさの本人がこんな所にいるなんてだれも思わないから安心しろ。』

と言って出て行ってしまった。まあ大丈夫だとは思うけど。

そついうわけでいま、家にはランクとシグラしかいなかった。

保存用の木の実の積み込みを手伝っている時、ふと疑問が浮かんだ。

「シグラ……。」

「ん？」

「ルークていつから用心棒してるの？」

そこしまを置いてからシグラは答えた。

「ルークは18の時からあんな仕事をしているんだ。」

「18!」

ランクが驚くのも無理はない18と言えば親の仕事を継ぐかどうか考え始めるころだ。

驚いているランクを横目にシグラは続けた。

「ルークはこの国の出じゃないことはお前にもわかるな。」

ランクはうなずいた。この辺りでフライゴンなんて旅人しか見たことがない。

「ルークはこの国の西、カトラルの出身なんだ。訳ありでこの国に逃げてきたって聞いた。」

ルークはこの国の出身では無いことは薄々気づいてていたがカトラルだったなんて。

「その訳とは？」

「知らない。」

即答だった。

「お前もあの首飾りを見たことがあるだろ。あれはルークの師匠の形見なのさ。」

「形見……。」

「そう形見。おっと急がないと日が暮れる。」

そのあとシグラは何事もなかった用に仕事をはじめた。

ルークはたくさん荷物を持って帰路についていた。もう日が傾いてヤミカラスが鳴いている。

「遅くなってしまうたな。急がなければ。」

そう思い進んでいくと人影が見えた。

あちらもこっちに気づいたようでこちらに歩いてきた。

よく見るとつけている紋章に王国の印が付いていた。

「こんばんは」

「・・・こんばんは」

何か話さなければ不自然に思われると思い話につきあうことにした。

「何の用ですか。」

警戒しながら話を進める。

「ルークさんですね。」

おもわぬところで自分の名前が出てきた。驚いたがここは冷静に

「人違いでしょう。」

用心棒の基本だ。仕事中は名前は自分から言わない。

「すいません、自己紹介がまだでしたね私は將軍のガルです。」

確かにそんな体つきのボスゴドラだ。

「用が無いのならいいですか私は急いでるんで。」

「俺はあなたの味方です。王子はどこですか。」

味方だと言われても信じる訳にはいかない。

「人違いです。ほかを当たってください。」

そう言っただけのまま通り過ぎて行った。追ってくるような気配はない。

そのままルークはシグラ達のもとへ向かって行った。

## 10話 旅立ちの準備（後書き）

ルーク「これで前回のグタグタは治ったのか」

たぶん

ルーク「ハアー　まあここからが本番なんだから頑張っていきま  
すか。」

11話 山小屋（前書き）

キャラクター人気投票実施中！みなさん投票してね。

ルーク「こんなことを言っているということは全然来てないんだな。」

はい、一票も……。

ルーク「……読者の同情を買うより自分の文章力をあげたらどうなんだ。」

はい、頑張ります。

## 11話 山小屋

翌朝

「ぞ、ぞぶい 寒すぎる。」

いま、三人は山小屋に向けて移動していた。

ルークのけがはもうすっかり良くなっていたので飛んで移動している。

秋だといっても上空の風は強く気温も低いから体感温度は低い

「ちよつとは我慢しろ。だったら歩いて移動したっていいんだぞ。

まあ、歩いていたら五日はかかるけど。ほら、あそこだ。」

ルークの指差したところには確かに小屋がある。

のんきにシグラが言った。

「ここはガレンとカトラルの国境にあるガルバ山脈の一番手前側、つまりガロウ山の山腹なんだ。

崖がおおい難所らしいから気をつけろよ。」

「（崖がおおいて・・・そっいえば寒いので平気なのかな。）」

「降りるぞ」

「うわっ」

ルークとシグラは音もなく地面に降り立った。

小屋は思ってたよりも大きくー（まあ、ボーマンダが暮らしてるんだから当たり前か。）すっかりとした造りになっている。東は断崖絶壁の崖、南には木の実の畑、いかにもシグラらしい。

「開くかな？」

「えっ」

「おい、手入れに行ってるんじゃないかったのか。」

「行ってたけど、今年は、こんなに、雪が降るなんて、思わなかった、から。」

そう言いながらドアと格闘していると、バリバリつと音がして氷が砕けいかにも錆ついているような音を立ててドアが開いた。中は毎月手入れしてあるだけにきれいだ。

ルークはドアを見ながら言った、

「これは雪が本格的になる前に直さないとまずいぞ。」

確かにさっき開けたせいで戸が外れてしまっている。

「じゃあこつしよ。。。。」

「やっぱりこうなるんだから」

「文句いってないで早く直してくれよ。」

「うるさい。」

ルークは木を切り出しながらぼやいている。

「あーあ、じゃんけんで負けるなんて。」

しばらくして立派な戸ができた。大きさはぴったりで動きも滑らかだ。

「ルークって大工やった方がいいんじゃないのか？」

「うるさい。そっちはできたのか。」

「全然。」

「お前、私だけに仕事を押し付けたな。許せん。」

「ギャー」

この二人は日常だといつもこうなのだろうか、仲がいいのやら悪いのやら。  
でもこれからが楽しみになってきた。

「！・・・そうだランク。」

「何？」

「この小屋にいる間、鍛えなおしてやるからな。」

「えー。」

楽しみじゃなくなった。

11話 山小屋（後書き）

ルーク「なんか、ギャグ路線に入ってるな。」

しょうがないだろ。ただでさえ短かった話なんだから、

あ、そうそう読者の皆様これで前半部が終了します。

ルーク「これで！だってこんなギャグで」

ちよつと黙ってて、というわけで第一回キャラクター人気投票はここまで

でてきたキャラクターに限ります。

あつそういえば『獵犬』の名前一回も出してなかった。『獵犬』が楽しみだったと言う方はごめんなさい。

ルーク「ちよつとしゃべりすぎ、次回からは中半部に突入！お楽しみに。」

せりふをとるな。

## 12話 特訓(前書き)

神を呼ぶポケモン略して神ポケ中半部突入!

ルーク「神ポケってなんか聞いたことがある様な・・・。」

気のせいですよ。ここからは本編に関係ないところろを3〜4話ほど書いていきます。

ルーク「じらしたら読者さんがかわいそうだろ。」  
だって・・・。

## 12話 特訓

ヒュッ

「遅い！」

「はい！」

「はーあの二人は頑張るねー。」

シグラがお茶を飲みながら言った。

もちろん答える人はいないが・・・。

この山小屋に来てはや三週、ランクの王宮訛りも取れ始めている。

二人は近頃ほぼ毎日特訓をしている。

初めはぎこちなかったランクも今では結構さまになってきた。

「わきが甘いな、そんなことじゃ攻撃のダメージを減らせない。もっと相手を見るんだ。」

「はい！」

ルークが教えているのはカトラルの戦法の基本、防御と攻撃が同時にできる体術だ。

なんでこんなことを知っているのかは分からないが、ルークはこの技完全に使いこなせることができる。

まあ使えないで教えることなどできないが。

「この後の傷の手当てはいつも俺がやらなくちゃいけないんだよな。」

「いたっ」

ランクの額から傷が出ている。ひどくはなさそうだ。

「ほらこついつ怪我だよ。まったく。」

「おい、聞こえてるぞ。」

ルークがこつちを見ていた。

「そのおかげで傷を手当てするのが上手くなったんだろ。」

「確かにそうだったけど……。」

ルークは昔、特訓で毎日のように怪我をしていた。

その傷の手当のおかげでシグラの薬草師としての腕が上がったのだ  
った。

「今日はここまでにしておくかな。ランク、その傷大丈夫か？」

「一応。」

そんなことを言っているがかなり痛そうだ。

「は、傷を見せてみる。」

そついうとシグラは慣れた手つきで傷を見ていく。

ルークが横から覗き込んでいった。

「お前、普通に薬草師として店を出せるんじゃないか。」

「そんなことしたら一針、銅貨一枚で縫ってやるよ。俺が有名じゃないからタダで縫ってやるんだから。」

「それは困るな。」

ルークが冗談みたいに言った。

その言い方が面白くて笑いがこみあげてきた。

「おい、ランクが笑ってるぞ。」

「なっ、笑うな！」

ルークが顔を赤くして言った。

「ルークもこんな顔するんだ。」

「なんだって？」

「なんでもなし。」

意外と楽しくなりそうな気がした。

## 12話 特訓（後書き）

次回もあんまり本編編は関係ないかもかもです。

ルーク「じゃあ書くなよ。それにその かもかも ってなんだよ、気持ち悪い。」

失礼な。でも自分でやってみて恥ずかしいかも……。

ってそんなことは関係なくて次回はランクが一人で街へ繰り出します。

ルーク「なんか 初めてののおつ〇い みたいじゃないか。」

そんなことはないです。ちゃんとしています。

### 13話 ランク街へ (前編)

二人は街へ来ていた。目的はこれから来る本格的な冬への準備のためだ。

「ん？あれは。」

「どうしたの？」

ルークは目を細めたが質問には答えず見ていたほうへ走って行った。

「やっぱり・・・。」

ルークの下には一匹のディグダがいた。

「(このディグダどこかで)」

「忘れたのか。レスだよ。なんでこんなところにいるんだ街を出るといっただろ。」

「(思い出した。この子はグラエナに襲われる前にかくまってくれた子だ。」

でも確かルークに街を出ろって言われてもういないはずじゃ・・・。  
「(」。

「だってルーク兄さん俺たちはここでしか生きていけないんだよ。」

「(ああ納得。つまりこの街を出て行きたくなかったってことだ。」

まあ当たり前か。「(」

「ちょっと待て、いま『俺たち』って言ったな。じゃあサラもここに  
いるのか。」

「ええもちろん。そうだルーク兄さん、俺たちの店によっててよサ  
ラも居るし。」

「寄ってくつたてどこにあるんだよ。」

「ここです。」

「えーここ。」

驚くのも無理はない、前回の家とは比べ物にならないくらいきれい  
になっている、何よりちゃんとした家になっている。

「サラ今帰ったよ。お客さんも連れてきた。」

そういうと彼は目の前の家の中に入って行った。

彼はルークの渡した金貨で家を建てて『なんでも屋』を開業したそ  
うだ。

家の中には台が一つあるだけだったがまだ奥にも部屋があるらしい。

「どうですかこの店、しかも俺はこの街のことを知り尽くしている

「からいい商売でしょ。」

「確かにな。」

「でしょ。」

「じゃあ一つ頼みたいことがある。」

「なんですか？」

「この子に一般市民の暮らしを教えてやってくれ。」

そついうとランクを前へおしだした。

「え！ちょっと。」

反論したがルークは全然聞いていなかった。

「できるよな。」

レスは少し考えてから「いいですよ」と答えた。

「行ってらっしゃい。」

どこからかサラができて言った。

「大丈夫だ私もちゃんと近くにいるから。」

ルークもそう言った。

「近くにいるって言われてもな。」

ランクはそう言いながらレスを追っている。

「なんだよ俺が信用できないってことか。」

「そういうことじゃなくて……。」

「そうだ！」

ランクの反論はレスのアイデアによって遮られた。

「今からお前は、俺のことを『アニキ』って呼ぶんだ。いいだろ。」

「アニキ？」

「うーいい響きだ。じゃあ、まずはあそこ。」

彼が指したところにはカルを売っている店があった。

「あそこに売っているももモンのカルを半分の値段で買ってくる。」

「そんなの無理だよ。」

「できるさ。俺が手本を見せてやる。」

13話 ランク街へ (前編) (後書き)

長くなりそうなので前半と後半に分けることにしました。  
ルーク「そんなに面白いところなのか、ここの場面は？」  
絶対に面白く書いて見せます。

14話 ランク街へ (後編)

「あいつへんなこと教えてるんじゃないよな。」

ルークが他人の家の屋根の上で話している。

「・・・たぶん。」

それに答えるのはこれまたルークの頭の上のっているサラだ。

二人はあの二人の様子を見るために追いかけていた。決してストーリーカーとしてではなく、保護者としてである。

「やっぱり心配だな。」

「うん。」

「いいかまず俺が見本を見せてやるよ。」

上から見られているとは知らずにレスは得意げに店の前に行った。  
店主は無愛想なオクタンだ。

「いらっしやい。」

「モモンのカルを二つ。」

「はいよ二つで二ロウだよ。」

「えっ二ロウ〜。」

語尾が伸びている。

「向こうの店では一ロウ五レイで売ってたよ。やっぱり向こうで買おうかな〜。」

それを聞いて店主の眼の色が変わった。

「まつ待ってくれならこっちは一ロウ三レイで売る。」

それを聞いたレスはさらに追い打ちをかける。「

「もうひとこえ！あと、三レイ下げてくれたら俺がこの店は一番だっけって宣伝しておくからさ。」

「うーん分かった！一ロウだ！」

「やりー。」

レスが買ったカルを食べながら得意げに戻ってきた。

「どうぞだつまくいっただろ。次はお前な。」

「うん！」

「どうやらあそこの店主はおだてられると安くしてくれるようだ。ランクも1ロウでカルを手に入れた。」

「うまいだろ。」

「うん。」

「商人になるならこのくらいの値引きはできないといけないからな。」

「商人？別にボク、商人になりたいわけじゃないんだけど。」

「そつなの！」

「うん。」

レスが「なんだよ」と嘆きながら歩いていくと……。

「イタッ」

レスが突然立ち止まった。

「どうしたの。」

「あれ。」

彼が指差した方にはマダツボミがワンリキーたちに襲われていた。マダツボミは全然抵抗をしようとしなない。

「俺はああゆうやつらが嫌いなんだ。」

「えっそれって。」

レスがマダツボミをかばうようにワンリキーの前に出るのが見えた。

「えっあれってレスじゃないの。」

サラが言った。

しばらくするとランクまで割り込んできた。

「ランクまで。」

しばらく言い争いをしていたが次第に殴り合いになってしまった。  
力ではワンリキーにかなうわけがない。

「ルークさん！早く助けに行かないと……。」

「まだだっ」

「ルークさん？」

「さて、これからランクはどうするかな。」

14話 ランク街へ (後編) (後書き)

なんだか長くなりそうなので次の話の半分くらいこれに削られそう。  
あとワンリキーL A V Eの人はすみません。

## 15話 喧嘩(前書き)

前回の更新から随分と経ってしまいました。

実はもう最後まで考えてあるんですがなかなか更新できないんです。

## 15話 喧嘩

ランクはされるままにしていた。

反撃を試みるも全然当たらず何もできなかったからだ。

レスは乗り込んでいったところまでいいが、一発殴られただけで伸びてしまった。

「グッ！」

思いつきり腹を殴られた。

その時、ある忘れていたことを思い出した。それはルークとの修行中のことだ。

たしか、相手の動きを予想して攻撃を当てるのだそうだ。

「（よし、やってみよう）」

「ぼさつとするなよっ。」

ワンリキーが顔を狙ってパンチを繰り出した。

その時、確かに相手の動きが見えた。それをよけ相手のがら空きの腹にパンチをたたきこんだ。

「うっ」

相手は一瞬ひるんだがすぐにランクの胸ぐらをつかみあげた。

「うっ」

ワンリキーはランクの顔に殴りかかろうとした。

「おっと、そこまでだ。」

そこにはワンリキーのこぶしを軽々と止めているオレンジの眼をしたフライゴンがいた。

「だれだお前は。」

「通りすがりのフライゴンだ。」

それを聞くとワンリキーはどこかへ行ってしまった。

「ルーク、なんでここに。」

「なんでって見ているっていったら。すまないレス痛い目にあわせてしまったな。」

「だいじょうぶ？」

上からサラが下りてきながら言った。

「ルーク……。」

「ん？どうしたランク。」

「実は……僕に、僕に技を教えて。」

「無理だ。」

即答だった。

「どうして」

「私は、リオルの覚える技なんて知らない。使いたいのなら自力で何とかするしかない。」

私の教えたのはカトラルの武術だ。これは、格闘タイプの攻撃の基本中の基本だ。これは反射的にできないという意味がないんだ。でもお前は大丈夫だろう。さあ帰るぞ。」

そのあとレスとサラと別れ二人は帰路についた。

15話 喧嘩（後書き）

あの技って格闘タイプの基本なんだね。  
ルーク「そうだ。」

なんで知ってるの？  
ルーク「それは次の話だ。」

## 16話 次なる作戦（前書き）

猟犬を出さないと考え出した意味がないので書きます。  
楽しみにしていた人はごめんなさい。

## 16話 次なる作戦

隣国 ジャルス王国

その王は怒りに声が震えていた。

猟犬達が何もできずに戻ってきたからだ。

リーダーのアルが薄布の向こう側で頭を下げているのが見えた。王は怒りが口に出るのを抑えながら口を開いた。

「われ<sup>めい</sup>の命が叶えられなかったのは初めてだな。アル。」

「・・・申し訳ございません。」

「普通のものならとうにその首を取ってやるところだが、お前はただ役に立つ。だが次に命<sup>めい</sup>を果たせなかったら、命はないと思え。」

それはチャンスと同時に命を握った事をあらわしていた。

「はい。次は必ず。」

そういつとアルは王室から出て行った。

アルは獵犬にだけ用意された部屋へ向かって行た。

獵犬は他国ではもちろん、この国でも知っているのは王と獵犬、そして数人の側近しか存在を知らない。

。 獵犬は主に王の命を受けて行動をする。それが暗殺だろうと……。

アルも、何度か王の命を受けて家臣を殺したことがあった。

その時のことは忘れたくても忘れられることのないことだ。

部屋には、すでに三人の獵犬がいた。名は デン ガイ カトルだ。アルは全員をみわたし口を開いた。

「王からの命だ、冬の終わりに対象物をこの国につれてくるんだ。もう二度目はない、必ず、捕獲するんだ。あのフライゴンは殺してもかまわない。いいか！」

その命を聞くと獵犬達は、ガレン王国に向けて走り出していった。

## 16話 次なる作戦（後書き）

今回は特別ゲストのアルさんに来ていただきました。拍手！

アル「……………」

ええつと、アルさん？

アル「……………」

アルさん。返事をしてくださいよー。

17話 ルークの過去？（前書き）

ルークの知られざる過去が明らかに。

## 17話 ルークの過去？

西日の光る街からの帰り道、ランクは話を持ち出した。

「ルーク。」

「ん？」

「ルークは何でカトラルから逃げ出したの？」

『カトラル』と聞いたとたんルークの眼付が変わった。

「なぜそのことを知っているんだ。」

「なぜって、シグラが教えてくれたんだけど・・・。」

語尾がだんだん弱くなっていく、話してはいけないことを持ち出してしまったのではないか。と心配になったからだ。

「いいんだ、別に隠すようなことじゃないんだから。」

その不安を感じ取ったかのようにルークは答えた。

「ランクはこの国が好きか？」

「もちろんだよ！この国は僕にとって大切な所なんだから。」

「そうだろうな。だが私の故国の思い出は暗いものの方がおおい。ランクは、いまのカトラル国王の名を知ってるだろう。」

「ラーク・セレン様でしょ。」

自信がある王宮でハラシが教えてくれた人だ。会ったことはないけど。

「そう、私の実の兄だ。」

「えっ！そ、それじゃあ 僕はいままでとんでもなく失礼なことを

」

語尾が震えている。相手は大国、カトラル王国の国王の弟だなんてこんなカミングアウトはなしだろう。

「別にそんなに驚かなくてもいい。とっくに私は王家の者じゃないんだから。あれはもう十八年近く前の話だ。シグラにも話したことがない。あいつはこういう気遣いが出るから私から話すのを待っててくれたんだろうな。」

二人の間に風が吹き抜けて行った。

「私はあのままカトラルで生きていけばセレン氏族領、領主になっ  
ていただろうな・・・」

十八年前 カトラル王国

ルークは兄ライクとは違い物静かでどこか大人びている所があった。最近、先代のセレン氏族領主が殉職してしまったためルークは次期氏族領主として有力だった。

（カトラルは七人の族領主がいるがセレン氏族だけが王家の血を継いでいる。）

だがある事件のせいでルークの逃亡生活はここから始まった。

## 17話 ルークの過去？（後書き）

次回から十八年前に時間が遡ります。

ルークの身に何が起こったのか！

ルーク「なんで前編、後編のかたちにしなかったんだ？」

そんなのまえみたいになちやうと嫌だからに当たり前ですよ。

18話 ルークの過去？（前書き）

十八年前のカトラルで起こったこととは。

## 18話 ルークの過去？

ルークは牢の中に閉じ込められていた。

国家への反逆という身に覚えのない罪を着せられていたからだった。

その事件は3日前、

ルークが街へ放火しようとしていた者と話をしたからだった。

それはルークが氏族領主になるのを嫌がっていた役人たちの仕業だったのだが分かる訳もなかった。

ルークはそこで城の内部を教え王を殺すてだすけをすると話したこ  
とになっていた。

その夜、ルークの牢のまえに誰かが来た。戸のほうを見ると当時の  
カトラルで一番強いと言われていた氏族領主のカイリユーのカイが  
いた。

「何の用。」

どうせまたただの様子見だと思いやり過ぎそうだったが、会はず想  
外の行動に出た。

牢の鍵を開けたのだ。

啞然としているルークにカイは

「早く出る。」

と、言ったただけだった。

カイはルークの母親つまり王妃に頼まれたと言いルークを連れて街から出た。

秘密裏につかまっていた為、街のポケモンたちはたいして驚きはしていなかった

だが、その役人たちはどうしてもルークを亡き者にしたかつたらしく、

二、三日後には追手を送り込んできた。

それはカイとともに戦ってきた仲間たちだった。

カイは容赦はしなかった。

追いかけてきたポケモン達は全く太刀打ちできずに戦える状態ではなくなってしまうた。

それだけカイは強かったのだ。

そのあと何回か追手が来たがカイはほとんどけがをすることなく追いかえしてしまった。

国境を超えガレン王国に入ってから追手が来た。それは同じ族領主のアブソル達だった。

死闘の末、カイはアブソルを殺してしまった。

そこからルークの人生が大きく変わるところだった。

18話 ルークの過去？（後書き）

昔話はかなり苦手なので、おかしなところや読みにくいところがあるかもしれないです。

たぶんあと4話ぐらいで後半に移れるといいな。

19話 ルークの過去？（前書き）

カトラルからガレンへ場面が変わり・・・。

## 19話 ルークの過去？

カイが仲間だったアブソルを死なせてから、カイは丁重にアブソルを葬りサガル師の家―（今はシグラの家になっているけど）へ戻っていった。

そのころルークはナックラーからビブラーバに進化していた。その時がルークの人生の分岐点になった。

「カイ。」

「？」

「僕に、戦い方を教えてほしいんだ。」

「！・・・なぜだ。復讐のためか。自分をこんな目にあわせた国に對しての。」

確かにそうかもしれないがそれだけではない。

「僕は・・・僕のために誰かが傷つくのは見たくないんだ。だから・・・。」

カイにその言葉が伝わったかどうかは分からないが翌日から戦い方を教えてもらう事になった。

ルークは氏族領主になるために軍事訓練を受けていたが全く役に立たなかった。

やっぱり実践では違う。ルークはいつも傷だらけになっていた。

ある日大きなけがをしたことがあった。

大したことはないと思いとりあえず布で血を止めておいた。

そこで一匹のタツベイが泣いていることに気がついた。

「何？どうかしたの？」

「痛くないの？」

「何が？」

「その傷。」

「痛い。」

「じゃあちよつと見せて。」

そのタツベイの名前はシグラと言っらしい。その時の手当ては決して上手とは言えなかったが。

そのあと、けがをすると絶対にシグラが治すようになっていった。そのおかげでシグラの手先が器用になったのだろう。

つまり、シグラが薬草に詳しくなったのはルークのおかげでもあるということだ。

その辺はどうでもいいが。

その後ルークはフライゴンに進化してまさに『水を得た魚』のよ  
うに、次々と新しい技や戦い方を覚えていきカイとの戦いで10回  
中5回は勝てるようになっていた。

その時の感覚はまだ覚えているしカイのいていた言葉も忘れてはい  
ない。

19話 ルークの過去？（後書き）

次回、ルークが用心棒になったきっかけが！

## 20話 ルークの過去？（前書き）

昔話がやっと終わり現実に戻ってきました。

## 20話 ルークの過去？

ランクは道端にある大きな岩の上に座って聞いていた。空はもうオレンジ色になり夜が近づいてきている。

「それで、そのあとはどうなったの？」

「カイは死んだんだ。何かに病気にかかって。そのころは私一人でも暮らしていけるくらいにはなっていた。」

ルークが首にかけている青い首飾りを手の上で転がしながら話す。

「その時、私はこれに誓ったんだ『あなたの奪った命の数のポケモンを私が助ける』って。そうしたら。」

「そうしたら？」

「カイはこう言ったんだ『命を奪うのはたやすいことだが命を救うのはとてつもなく大変だ』ってな。」

すぐにその言葉の意味を思い知ったよ。私はカイが死んでからの三年間で5人は殺してしまっただから。」

「.....」

「ランク。」

「うわっ！」

突然声をかけられたので岩から落ちそうになった。

「なぜ、今私たちが逃げているのか知っているだろう。物事にはすべて理由が必要なんだ。生きるためにも死ぬためにも。私は生きてる理由があやふやな存在だ。そんな私なんか生まれてこないほうがよかった。」

「何でそんなこと言うの！」

ルークが驚いた顔で見上げている。

言った本人もかなり驚いたが言葉が口から滑り落ちるように出てくる。

「生きる意味がないなら作ればいい！それだけでしょ。」

「・・・そうだな。」

そう言うとルークは歩きだした。

「まさかお前に元気づけられるなんてな。」  
ルークが嫌味っぽく言う

「それってどういう意味。」

それに対してランクは少し怒ったような口調で答えた。

「そういう意味だよ。」

少し行ってから突然ルークが立ち止まった。

「ランク。私はお前を絶対に見捨てたりはしないからな。」

めったに笑わないルークが微笑んでいた。

## 20話 ルークの過去？（後書き）

ルーク復活！

ルーク「復活ってずっと私はここにいたぞ。」

でも表には出てこなかったじゃない。

ルーク「それは……。そんなことより次回予告。」

そうそう 次回ランクがー！

ルーク「なんだそれ。」

## 21話 消えたランク（前書き）

題名のセンスのなさには目をつぶって下さい。

## 21話 消えたランク

雪降ゆきふりノ月がもうすぐ終わり、間もなく雪解ゆきとけノ月になる。

ランクは一人で山小屋にいた。

食料の整理をしていると戸が開き誰かが中に入ってきた。その時

「催眠術。」

一瞬でランクは眠らされ外へ連れ出された。

ルークは崖の上にあった。

まえには石を積み上げて造られた簡単なやまがある。

「この墓は私の恩師が眠っているんだ。ここでは暴れないでほしいな。」

ルークは前を向いたま後ろの茂みに話しかけた。

「やはり気づいていたか。」

その茂みからグラエナのアルが姿を現した。

「何の用だ。」

「邪魔者は片づけておいた方がいいからな。」

「ふっ お前一人で私に勝てると思っているのか。」

「もちろん。お前は俺たちに従うしかないんだからな。おいっ！」

アルが呼ぶと他の猟犬達があらわれた。その手の中にはランクがいた。

「ランク！」

それを見るやルークは飛び出した。

「いけっニューラ。」

二匹のニューラが茂みの中から飛び出し冷凍ビームを放った。

「そんなもの効くか！火炎放・・・何！」

火炎放射を放とうとした瞬間、真横から氷のつぶてが飛んできた。

ルークはそのまま反対側の崖に打ちつけられ谷の底に消えた。

それを見たアルは「行くぞと」と言うと猟犬達はケーシイのテレポ  
ートで消えた。

## 21話 消えたランク（後書き）

次回、崖から落ちたルークは、そして連れさらわれたランクはどうなるのか

## 22話 仲間のもとへ(前書き)

まだ22話なのに意外と短い話だったのかな。自分では長いと思っ  
ていたけど・・・。

## 22話 仲間のもとへ

シグラは谷を飛んでいた。山小屋の下にある谷だ。

「おいつ！へぼ弟子 もっと速く飛ばないか。」

「そんなこと言っただって、サガル師この辺りは風が強くてこれが限界なんです。」

彼の上のっっているのは途中で拾ってきたまじない師のサガルだ。

「そんな理屈を言っているんだっただらもっと早く飛ばんか！嫌な予感がするんじゃない。」

「嫌な予感？」

シグラが前を向いたときだった。谷川の白い石がたまっている中州に誰かが倒れている。

「ルーク！」

「なにっ！」

ルークは気を失っていた。ゆすつても起きない

「ルーク！ルーク！」

「けつたら起きるだろう。」

そう言うとサガル師は軽やかにシグラを飛び越えルークの顔を覗き込む

「だめですよサガル師。あまり乱暴に扱わないで下さいよ。」

その時ルークがうめき声を出した。

「ルーク！大丈夫か」

ルークの目がこちらを向いた。

「シグラか・・・私はどうしたんだ・・・。」

「お前はここに倒れてたんだよ。ランクはどこへいったんだ。」

「ランク・・・。そうだ！ランクを連れ戻さない！」

そう言って立ち上がるがすぐによろけてしまう。

「落ち着け。ランクがどうしたって。」

「シグラがなだめながら座らせる

「とにかく最初から話してくれ。」

ルークは二人にすべて話した。

猟犬がランクをさらったこと

不意打ちを食らい谷へ落ちたことを

「すまない……。私が油断したばかりに。」

「気にするな。また連れ返せばいいだろ。」

「ならば、いいところへ連れってやる。」

ずっと黙っていたサガル師が口を開いた。

「いいとこ？それは一体？」

「ついてこればわかる。我らの仲間の所じゃ。」

「ナカマ？」

「そうじゃ。おい！へぼ弟子！」

「またその言い方。」

「どつでもいい。さっさと準備しろ！」

## 22話 仲間のもとへ（後書き）

ルーク「この頃私をここに出さなくなったな。」

まあこちらにもいろいろ事情があるんですよ。それより話が急転するんですから気をぬいてると分からなくなっちゃいますよ。

ルーク「はいはい。」

## 23話 仲間たち(前書き)

特に新キャラとかはでないので期待しないでください。

## 23話 仲間たち

ルーク、シグラ、サガル師の三人はレスたちの店の前にいた。

「こつちだ。」

サガル師が案内したのはその店の裏だ。裏には川が流れているが板が立てかけてあるため対岸からは見えないようになっていた。

裏口を開けるとそこにはレスとサラ、そしてどこかで見ることがある二匹のポケモンがいた。

一匹はボスゴドラでガレン王国の国章を付けている。もう一匹のヨルノズクは彼の角の上に止まっている。

サガル師が口を開いた。

「この二人は王宮にいたとき、ランクの世話係をしていたそうじゃ。こつちのボスゴドラのほうは……。」

「ガレン王国の軍事面を担当するガルといいます。あの時は逃げたしまわりましたが、次は逃げないでくださいね、ルーク殿。」

「あの時の紋章は本物だったんですね。」

少々馴れ馴れしく彼は挨拶を交わすのをルークが冷静に受け流す。

「そしてこつちが……。」

「ハランと申します。サガル師にはいろいろと協力をさせてもらいました。」

彼女は高い声で自己紹介をする。

「彼らは王妃に頼まれお前たちを探していたんだが・・・ルークが無駄な事をしなければ。」

サガル師がルークに対して皮肉ねいた言葉で言うがルークはそれを無視して話の続きをガルに促した。

「俺たちはあなた方の手助けをしると言われている。大体の話はサガル師から聴かせてもらった。

王子はどこにいるんですか？」

「それは・・・。」

ルークは彼らに今までのことを話した。  
ハランの顔が青ざめていく。

「じゃ・・じゃあ王子は彼らにつかまっているんですか。サガルさんどうするんですか!」

ハラノ語尾を強める。

「その事じゃがやつらの行こうとしているところが分かった。封印の丘じゃ。」

「封印の丘!」

今まで黙っていたシグラが驚いたように言う。

「どういうところなんだシグラ。」

「封印の丘は木はおろか草さえ生えていない岩だらけの丘だ。」

「そう、そこで封印を解く気じゃな。だが封印が解けるのは春の初めの満月の晩じゃ。まだ時間はある。」

「急いでそこへ向かおう。満月まではあと三日しかない。」

ルークの意見に口を出す者はいなかった。

全員だが支度をし出発したがしばらくして

「ハラン殿は私と一緒に来てくれ。」

と、サガル師が言いだした。

「なぜですか？」

ハランが不思議そうに聞くとサガル師は

「いろいろと準備が必要なんじゃ。」

と、答えた。

「大丈夫だ。必ず間に合っつて見せる。」

「まかせましたよ。」

ルークが言うと、二人は別の道へそれていった。

残った三人は足早に封印の丘へ向かって行った。

## 24話 ランクとアル（前書き）

だんだん書きやすくなってきたから文章が多くなってるかも  
ルーク「普段もこのくらい書ければいいんだけどね。」

## 24話 ランクとアル

「う・うーん、ここはどこだ」

ランクは牢の中で目が覚めた。牢には幕が掛かっけていて外は見えない。

耳を澄ましていると外から声が聞こえてきた。

「まったくなんでこんな事しなきゃなんないんだよ。どうせ、中の奴は出てくるわけないんだから。」

どうやらこの牢の番を任されたことに対する愚痴のようだ。愚痴はまだ続いていく

「大体、封印の丘なんてそんなどうでもいいところに、なんでこんなものを運ばなくちゃいけないんだ。俺も早く前線に出て戦いたいの……。」

どうやら、ランクはシュロ軍にその封印の丘というところに連れてかれていているらしい。

「(でもなんでそんなところに……)」

「これはアル様！わざわざこんな辺鄙な場所までいらっしやらないで、私共のほうからおうかがいしましたのに。」

突然の外からの声にランクは驚いた。

「いいんだ。俺も封印の丘へ用がある。中の様子はどうだ。」

「異常はありません。ですがそろそろ目が覚めるころではないかと・  
」

「そうか。」

アルは少し考えるしぐさをした。

「中に入れてくれ。」

それを聞いたランクは牢の反対側へ移動した。まさか入ってくるなんて、牢番もそう感じたのか驚いたような口調で答える。

「はい！もちろんでございます。」

そのあと幕の下あたりが持ち上げられアルが入ってきた。どうやら夜だったらしく月の光でアルの姿が浮かび上がった。

「気分はどうだ。」

「えっ」

予想外にもアルの第一声はそれだった。

「気分はどうだと聞いているんだ。」

「いいです。」

アルの姿からは異様な威圧感が出ていて自然と声が上ずる。

その質問の後少しの間、沈黙が流れた。その間もアルは全く動かずにランクを見下ろす

「なんで……。」

その声と同時に沈黙が破れた。

沈黙を破ったのは意外にもランク自身だった。ランクはそのまましゃべり続けた。

「なんで僕なんだ、僕よりも凄いポケモンなんていくらでもいる。それなのになんで僕だけなんだ！なんで……。」

もう何を言っているのか自分でも判らなかったが、今まで我慢してきた不満が自分の中で一気に爆発したのが分かった。

それに対してアルは

「それを俺に言って何になる。」

と、言い捨てただけで牢から出ようとしたが、突然立ち止り後ろを振り返らずにしゃべりだした。

「俺たちは国王様のやりたいことは知らされていない。だが俺たちは命令には絶対に逆らわない。逆らったら命はないからな。だがお前にはそんな運命はない。助かりたいのなら自分で何とかするんだな。」

そう言い捨ててアルは音もたてずに地面へ降り立った。一人残されたランクは、ただ茫然と立ちすくんでいた。

一方、ルークたちは途中、ガレン王国国境警備隊第三部隊のテントにいた。

この辺りでは敵の姿を目撃することはなかったが、ピリピリとした空気が流れていた。

ここで、ガルはこの中で最も頼れる、ハガネールのスファリーとジユカインのリーフを連れていくことにした。

「これで心強くなったなルーク。って聞いてるのか。」

シグラがルークの目の前で棒を振る。

「!・・・ああ、すまない。」

「心配するのはいいが少しは休めよ。お前いつも言ってるだろ、ほら、なんだっけ。」

「準備ができるなら最善の状態で行け。カイが昔、よく言っていた言葉だ。」

「心配してるのはみんな同じなんだから。」

「そっだな。」

封印の丘は夜の闇に暗く沈んでいた。

24話 ランクとアル（後書き）

いよいよ、最終決戦へ

25話 封印、解かれる（前書き）

やっと小説らしくなってきたと思ったたらもう終わりになっちゃったよ  
どうしよう。

ルーク「まあ、人生そうゆうもんだって。」

## 25話 封印、解かれる

ランクが入っている牢は封印の丘に到着した。

外は月明かりで少しうす暗くアルの持っている松明の周りだけがやけに明るかった。

「さっさと出る。」

ランクを牢から押し出したのはあの門番だ。

ランクは半ば無理やり外へ出された。その時、

「うっ！」

みぞおちにパンチを食らいランクは気を失った。

「ここからは俺たちだけで行く。他のものはこのあたり一帯を見張れ。抵抗したやつはどうし様と構わない。絶対にほかのポケモンを入れるなよ。」

アルは獺犬以外のポケモンたちに命令を出した。

それを聞いたポケモンたちはそれぞれの持ち場へ移動していった。

それを確認すると猟犬達も動き出した。

封印の丘を進むと、煌煌と松明の明かりに照らされた円形の大きな遺跡のようなところに着いた。その先は崖になっていて昼ならば王都が一望できただろう。

遺跡の四隅に途中で折られた柱のようなものが立ち並び、その中心に大きな陣が書いてある。

その陣はまじない師しか使わない字で描<sup>えが</sup>かれている。その中心に王はいた。

「アル、間に合ったか。」

相変わらず恐ろしい低い声だ。

「はい。」

カトルとデンがランクを王の前へ差し出す。

「よくやった。」

王はそれだけ言うと言くとランクを陣の中心へ置き、呪文と唱える。

「封印の陣によりとらえられし者よ、貴の選<sup>えら</sup>びしものを、封印の裂け目とし、我の前に姿を現せ。」

その言葉に反応して四隅の柱と陣の文字が青く光り始め、あたりは昼間のように明るくなった。

その時、一本の炎の線が上空を貫き遺跡の光っていない柱をなぎ倒した。

「誰だ！」

アルが炎の飛んできたほうへ向って怒鳴る。

その先にはには青い色をした角が特徴的なトライゴンの姿があった。それを見たアルは目を見開いた。

「まさか。」

「私の名はルーク、用心棒のルークだ！」

ルーク達はアルたちが到着した少しあとに封印の丘にやってきた。封印の丘は丘といっても草も木も生えていない岩山だった。丘に乗り込むと案の定、見張りのポケモン達から手荒い歓迎があった。

それを見たガルはルークとシグラにこう言った。

「あなた達は先に行つて。リーフ！」

「はい。」

「彼らを援護してくれ。」

「分かりました。」

「ちよつと、待て。」

ルークはすかさず反発した。

「あなた方の腕を軽んじているわけではないが、二人だけでは危険だ。」

「軽んじていないと思つているなら、俺たちを信じて行つて下さい。」

ガルはルークをまっすぐ見つめ返した。

「分かつた。」

そう言つてルーク達は丘の頂上へ向けて飛び出していった。

丘の上の遺跡ではすでに儀式が始まつていた。

ランクは謎の陣の上に寝かされている。

「あの陣は……。」

シグラが遺跡を見てつばやく

「どうした、あの陣がどうした。」  
背中に乗っているリーフが低めの声で聞いてきた。

「あの陣は封印の陣だ、前にサガル師に聞いたことがある。」

「じゃあ、あの陣を壊せばいいんだな。」  
ルークが横を飛びながら言う。

「駄目だ、あの陣を傷つけちゃ。何が起こるか分からないそれに、  
ランクが危ない。あそこの柱に攻撃して注意をこっちに向けよう。」

「よし、火炎放射!」

火炎放射は一直線に柱に当たり崩れ落ちた。

「誰だ!」

アルがこちらを向き怒鳴る。

「私はルーク、用心棒のルークだ。」

驚きを隠せないようにこちらを見る。

「馬鹿な、お前は谷に落ちたはずじゃ……。」

「ふふつ。そこから這い上がってきたのさ。ランクを返せ!」

「しるたごぞ。」

低い声が響き渡る。

「こいつを連れ戻しに来た。残念だったなもう遅い。」

「なに。」

ピシツという音とともに光っていた柱が崩れ落ちた。

「封印は解かれた。」

突然、ランクの周りの陣の文字が歪みはじけ飛んだ。そこで生まれた爆風で遺跡が崩壊した。とっさにルークと猟犬達はその爆風が来ない場所まで下がった。

「これがかつてこの国を救い、この国を破壊する神の力だ！」

ルークは爆発の煙の中で、さっきまで陣の中心だったと思われる場所に碧（あお）と一朱のポケモンらしき影を見た。

シグラは上空からそのポケモンを見てつぶやいた。

「あれが、伝説の、ディアルガとパルキア……。サガル師の言っていたことは本当だったのか。」

25話 封印、解かれる（後書き）

ルーク「次回、狂人的な力を見せるディアルがとパルキア。この二体を止めるすべはあるのか!!」

ちょっと楽しみを奪わないでくれよ。

26話 決意(前書き)

戦闘シーンってどうもうまく書けないんですよね。  
ルーク「しっかりしてよ。次から一番いい所なんだから。」

## 26話 決意

アルは柱の影で様子を見ていた。

一瞬にして遺跡の大半が崩れ落ちたが、この辺りはまだ原形をとどめている。

「これが、国王の求めていたものなのか。俺たちのやってきたことの結果なのか。」

蒼と朱のポケモンはまだ完全ではなく、色の薄く半透明な部分が見られるがそれでもかなりの威圧感を感じる。

「（これは掘り起こしてはいけないものだったんじゃないか）」

その考えがアルの頭をよぎる。下にはつい昨日までしゃべっていたリオルの小さい体が見える。

「アル。」

国王の低い声が響く。

「やつらはまだ生きている。邪魔になる芽は早く摘み取らなくてはならない。」

「はい。」

「いけ。そして、二度と立ち上がれないようにしてこい！」

アルは仲間を呼びその場を離れていった。

「ふふっ。もうすぐ、もうすぐこの地は我らものになる。」

アルは背中で国王の笑い声を聞いた。

ルークは岩陰に隠れていた。右足をぶつけたらしく

「くそっ。こんなに近くにいるのにランクを連れ戻せないなんて。」

さっきおこった爆風で、ここからランクの所まで隠れられる岩場がすべて吹き飛んでしまった。

それに丘の下にいた兵士が、音を聞きつけて集まってきたてしまい見つからないのが奇跡な状態になっている。

右足をぶつけたらしく動けないこんな状態で見つかったらひとまりもない。

そう思った矢先

「見つけたぞ！侵入者！」

「くそっ」

兵士のポケモンが攻撃を仕掛けてくる。

「動くな。」

静かな声と同時にポケモンの動きが止まる。その首筋には緑色に光る葉が突きつけられている。

「動くと喉を切り裂くぞ。」

「大丈夫か、ルーク！いま手当てするから」

そう言うとシグラは薬草を出して治療を始めた。すると痛みが和らいでいく

「シグラ！じゃあ、あれは」

喉に突きつけた葉を返し鳩尾に入れる。するとそのポケモンは気絶した。

「ルークさん。一人で行かないでください。」

一人のジュカインが岩陰に気絶したポケモンを隠す。

「リーフ！」

「再会の喜びはあとにしましょか。それよりも急いだ方がいいです。幸い、将軍もこちらへ向かっていますし。」

「そう思っているならさっさと行け。このへぼ弟子。しっかりせんか。」

反対側にある岩場の上に一匹のキュウコンとヨルノズクがいた。その下にはガル達の姿もある。

「サガル師!？」

「さっさと行け。ワシらが援護してやる。あのバカ王にひと泡吹かせてやれ。」

「ですが。」

「こんなザコ供、ワシらだけで十分じゃ。だろっ将軍さん。」

「もちろん。ルーク殿王子を助け出したいのは俺たちも一緒です。」

「分かった。」

そう言うとルークは岩の上に登る。そこからは一番手前に一般兵のポケモンたち、その次に獵犬、そして一番奥にディアルがとパルキアの姿があった。目指すはそこだ。

「いくぞ!」

掛け声と同時に全員が飛び出した。

## 26話 決意（後書き）

ルーク「戦闘シーン、あった？」

極力、減らすよう努力しました。次、盛り上がるかな？とか思っ  
て。

ルーク「これだから」

## 27話 ルークとアル（前書き）

話がまとまってないので読みにくいかも

ルーク「この一番大切な所で？」

「ごめんなさい。」

## 27話 ルークとアル

敵のポケモン達が襲いかかってくる。ルークはその敵を倒しつつラ  
ンクのところへ急ぐ。

ガル達はそれぞれ目の前の敵を倒している。

「待て。」

ルークの前にグラエナが立ちふさがった。

「ここから先は行かせる訳にはいかない。俺たちがここで止める。」

「猟犬か。そこをどけ」

グラエナはその言葉に耳を傾けることなく話を続けた。

「俺の名は、猟犬のリーダー、アルだ。国王の命令だ、貴様を殺す。」

どうやら一歩も退く気はないらしい。感じるのは殺気しかなかった。

「いくぞ！シャドーボール！」

顔の目の前に飛んできたシャドーボールを最小限の動きで避ける。

「ドラゴンクロー！」

「アイアンテール！」

二つの技がお互いの力を相殺する。  
その反動を使い、二人はお互いに距離をとる。

「お互い、力の差はないようだな。」

「そのようだな。だが私は、お前と争っている暇はない。」

アルが攻撃を構えながら言う。それに対してルークは隙を見せないように答える。

「いくぞ！」

ルークとアルが死闘を始めたころ、サガルは岩の上からシュロ王を見据えていた。

「シグラ。」

「なんですか、師匠？」

シグラが呼ばれた岩場のすぐそばまで降りて来る。

「嫌な予感がする。これを持っている。」

そうシグラに手渡したのはまじないがかかっている、木の棒だった。

それを手にしたシグラは驚いたようにサガル師を見た。

「このまじないは……。」

「もし、間に合わなかったら、私たちだけであの二匹を封印しなくてはいけなくなるだろう。」

「それはどういう……。師匠、待って下さい！」

それだけ言うとサガル師は先に行ってしまった。

「火炎放射！」

「悪の波動！」

またも二つの技が相殺して白煙が舞う

「ドラゴンクロー！」

「くそっ！アイアンテール！」

ルークのドラゴンクローをアルはアイアンテールで防ぐ。そのあとすぐに間合いを取る。

お互いかなりダメージを受け傷だらけになって息が乱れている。あと、どのくらい持つか分からない。

「なかなかやるな。」

口を開いたのはアルだった。

「いくら、腕のいい奴だつて俺と対等にやりあえるやつは少ない。

貴様のその動き我流ではないな、訓練を受けた動きだ、貴様何者なんだ。」

「用心棒のルーク。それだけだ。」

「そうか。ルーク、もうお互いそれほどもつまいでこれで決めるぞ。」

アルの殺気が一層強くなった。

「いくぞ！」

## 27話 ルークとアル（後書き）

次回、いよいよアルと決着が・・・  
ルーク「ちゃんと戦闘シーン書いてよね。」  
「頑張ります。」

## 28話 神の力(前書き)

初めの二つの段落を前に話を持っていけばと、ちょっと後悔  
ルーク「計画性のない作者だな。」

## 28話 神の力

アルはルークに飛びかかった。ルークはドラゴンクローで応戦する。すれ違った一瞬、それが勝負だった。

地に降りたアルは自分の胸のあたりから血の匂いを嗅いだ。

「クソツ・・・俺の負けだ・・・。」

アルはそのまま地面に倒れこんだ。ルークは少し後ろを向いてそれを確認すると血を振り払うように腕を振り、何も言わずにランクの所へ急いだ。

その様子を見ていたシュロ国王は怒りに震えてい。

「あの役立たずめ。」

呟きながら後ろを振り返るとさっきまでの怒りが一瞬で消え去り不敵な笑みがこぼれた。

二匹の姿が完全になり、代わりに一本の赤い鎖が二匹を抑え込むように伸びてきている。

これが二匹を操るためのものだろう。

「まあ、良いこれでこの地は我らのものだ。だが手始めにあの邪魔者を始末しなければ。」

国王は、アルの方を向き叫んだ。

「ディアルガ、『時の咆哮』。パルキア、『あくう切断』。」

指示と同時に二匹がエネルギーを集め、放出した。

アルは自分に向ってくるディアルガの攻撃を見て、王が自分を見捨てたことを知った。

短い生命だった。猟犬として生まれ、猟犬としてだけ生きてきた彼はそれがどういうことを意味するのかわからなかった。

「俺の一生もここで終わりか。」

ディアルガの攻撃が目の前に迫り死を覚悟した時だった。

突然、体が持ち上がり凄く速さで上空に浮きあがった。

「お前は……。」

「あまり喋るなよ傷にさわる。」

アルを助けたのはシグラだった。シグラは近くの岩陰に降りると手早く結界を張り傷の手当てを始めた。

「気休めかもしれないが、やらないよりはましだろう。俺はシグラよろしくな。」

シグラが傷を調べようと伸ばした腕をアルは掴んだ。

「どついう……つもりだ……。俺に……恩でも……売りたいのか。」

「別に、そう言っつもりじゃ……。」

「なら、なんだ。」

シグラが不思議そうに返した。

「医術を心得ているやつが、救える生命を救うのは当たり前だろう？少なくとも、俺はそうだ。だからその腕を放してくれ。」

アルがおとなしく腕を下ろしたのを見てシグラは傷の手当てを始めた。

「あいつは……何者なんだ？お前、あのフラ……イゴンの仲間……なんだろう。」

「何者ね。俺が知ってるのは、あいつはカトラルの出だということだけだ。」

ルークがあのだ二匹の攻撃をよけながら突き進んでいくのを見て続けた。

「それと、絶対に、誰も殺すことはない。現に、あなたのすべてに

傷も、致命傷になるものは一つもない。」

「……。」

「これでよしっ。しばらくは動かないくださいね。」

「……すまない。」

目の前に迫る攻撃をよけながら進んでいた。避けた攻撃が地面に当たるとエネルギーの衝撃で吹き飛ばされそうになる。足元の攻撃を、避けた時、顔のすぐ前に『時の咆哮』が迫ってきていた。

「（しまった。避け切れないっ）」

とっさに頭を守ろうと腕を交差させた時、何かがはじけるような音とともに、強い光が見えると同時に、

「おい、ルーク！しっかりしろ！」

という聞き覚えのある声がした。

「サガル師！」

あの光はサガル師の、防御のまじない『スファルカ』の光だった。

「いいか、ワシが全部の攻撃を防いでやるから、さっさと行ってこい！ランクの目をさまさせれば封印できるかもしれん。急げ！」

サガル師は次々飛んでくる攻撃をまじないで破壊していく。

「必ず、助け出してこい！」

その言葉を背に受けてルークはサガル師の作った攻撃の隙間をすり抜けていった。

28話 神の力(後書き)

ルーク「相変わらず戦闘シーンが下手だな。」  
うー。しょうがないでしょ慣れてないんだから。

## 29話 神を呼ぶポケモン

サガル師の作った攻撃の隙を何個か潜り抜け、ルークはシュロ国王に飛びかかり押し倒した。

その勢いでシュロ国王のかぶっていたフード付きのマントが滑り落ちた。

「お前は……。セミ！なんでこんな所にいる。」

驚きの声をあげたのはサガル師だった。

「なぜですって、それは、もちろん個の封印を解くためですよ。あなたはこの辺りで最も優秀なまじない師ですから。」

セミと呼ばれたシュロ国王のユンゲラーが立ち上がる。

「あなたの所にあつた書物は、大変役に立ちましたよ。だがもう用はない。消えてもらいま……。」

ルークの背後からのアイアンテールをテレポートで避け、再び空中に姿を現した。

「全く、あなたも凝りませんね。ディアルガ、パルキア！」

すると、ルークの真上から攻撃が飛んできた。さっきまでとは比べ物にならないぐらい破壊力が増している。サガル師のまじないが一瞬で砕けてしまった。ルークはぎりぎりで攻撃をかわしサガル師の横へ着いた。

「サガル師、あいつはなんなんですよ。」

「今は、話している時間はない。それよりあれを見る。」

サガル師の指した方には、ランクが力尽きたように倒れていた。

「いいか。あいつを何としても叩き起せ。そうすればワシが何とかすることが出来る。いいか意識を戻さないと意味がないからな。いけ道は作ってやる。」

「サガル師は、」

「わしなら心配いらん。死の淵までいった奴はなかなか死ななくなるもんじゃ。」

「おい何を話している。」

「別にただ、お前さんをどうやって捕まえるかを考えておっただけじゃ。」

言い終わるとサガル師はセミに向かってまじないを投げつけた。まじないは空中ではじけ強い光を発した。

「目くらましなど意味がない。」

「それはどうかの。」

「なに、なっなんだ。」

セミが見たものは、まじないで束縛されたあの二匹だった。

「ワシはまだまだこの国最高クラスのまじない師じゃ。そのくらい  
訳ない。今だ、ルーク！」

「言われなくても。」

すでにルークはランクのもとへ飛び出していた。

「ここは、どこ。確か封印の丘も麓で気を失って……。」

そこから先がまったく思いだせない。この暗闇の中でランクはた  
だ一人立ちすくしていた。

『我らを呼び出し者よ。』

「だっ誰っ！」

突然の夢の声、だが声の主が見つからない。

「誰！どこにいるの。」

『我らの名は、時間の神ディアルガと』

『空間の神パルキア』

その声とともに目の前に二匹大きなポケモンが現れた。

『ここはお前の精神世界』

『そこから我らの声を伝えてきた』

「それって、どういう……。」

『我らはここに封印されてきた』

『だが、我らは精神世界で呼びかけ続けた。それに答えたのがお前だ。』

突然、二匹が苦しそうに呻いた。

「どづしたのー！」

『我らにはもう時間が無いらしい。時間<sup>と</sup>がたちすぎた』

『お前が我らの最後の希望だ。今からお前の意識を元に戻す。あの声の元に』

耳を澄ますと聞き覚えのある声で自分の名前が呼ばれている。

『ゆくぞ』

「ちょっと待ってまだ聞きたいことが・・・。」

突然、周りの景色が歪み、ランクは外へ放り出されるような感覚を味わった。

「ランク、よかった目が覚めたんだな。」

重い瞼を開けるとそこには見覚えのある顔があった。

「ルーク？本当にルークなの？」

「当り前だろう。私がお前をほっという逃げ出すとも思ったか。」

「全然。」

「なら良いさ。」

バチツという音とともに青白い光が上空で光った。サガル師のまじないが壊れたのだ。

「この国最高位のまじない師も、大したことはないな。行け、ディアルガ、パルキア！」

「この国最高クラスのまじない師も大したことないじゃと、あの二匹がいなくて何もできぬ癖に。シグラ！」

大声でシグラを呼ぶと、サガル師は持っていた棒を地面に突き刺した。

それと同時に、全速力で飛んできたシグラも二匹を挟んで反対側に同じ棒を刺す。

「いくぞ！シグラ。」

「はい！」

サガル師とシグラが棒を抑えて呪文を唱える。すると棒からひものような物が延び二匹の動きを封じる。

「やめろ！」

セミがサガル師の邪魔をしようと飛び出した。それにルークは反応してセミにアイアンテールを打ち込んだ。

「なっ……！」

「貴様のようなやつに、国王を名乗る資格はない！」

自由落下のスピードに追いついたルークは、セミに怒鳴り付け二発目のアイアンテールを打ち込み、その体をガルが受け止めるのを

確認した。

これで邪魔を者はいなくなり、サガル師が封印をしようとしたが、  
「待って！」

突然、サガル師にランクが飛びつきまじないが途中で壊れてしま  
った。

「何を！する……。」

サガル師が出した怒った声は次第に弱まり消えてしまった。そこ  
にあったのはランクの真剣な目つきだった。

「サガル師、この人たちは、自分たち空間に戻りたいだけなんだ！」

「だが……。」

サガル師はランクの後ろで崩れかけたまじないが絡まり、苦しみ  
ながら暴れている二匹のポケモンを見た。

「サガル師！」

ランクが迫る

「サガリ師、もう意地を張るのは辞めたらどうです。」

ルークが横に音も立てずに着地してサガル師の声をかけた。

「……分かった。だがまじないを解く事しか出来ぬからな。シグ  
ラ！離れる！」

サガル師は鬼火でまじないのかかっている棒を焼き払った。するとひもが薄くなり消えた。

ランクは振り返って一声かけた。

「貴方達を縛っているものは無くなりました！貴方がたは自由です！」

二匹のポケモンはその言葉を確かめるように体を動かすと、自らが作った時空の裂け目に消えてしまった。

**最終話 新たなる旅路へ（前書き）**

いよいよ最終回！見ていただきありがとうございました。

## 最終話 新たなる旅路へ

あの戦いから一週間後、国境付近のシュロ王国軍は撤退しルーク達は王宮に戻ってきた。

まずランクが母親に抱き付きシグラがそれを微笑んで眺めた。サガル師は、こんな事は滅多にないから。と、ハランを引き連れて蔵書室へ行ってしまった。

「まったく、とんだとばつちりを受けたな。」

シグラが横の寝具から顔を出して皮肉じみたことを言う。

「なに言ってるんだ。自分だってランクと遊んでたじゃないか。」

「そういうお前はどうなんだよ。」

「私は、仕事をしただけだろ。」

シグラの質問にルークは素っ気なく答えた。

「やっぱり固いな。」

シグラがため息混じりに言った言葉を薄笑いをしながら受け流した。

「シグラ。聞いて欲しいことがある。」

「ん？どうした改まって。」

「私は……カトラル王国へ行こうと思う。」

少しの間沈黙が流れた。

「そんなこと俺に言っただろう。」

「何言ってる。サガル師から聞いてるんだろ、私の事を。」

「……まあね。」

「止めなくていいのか、友人として。」

「止めないさ、俺は信じてるから。信じてなかったら今まで何度も送りだしたりはしないさ。」

そのあとシグラは寝てしまったのか何も話さなくなってしまった。

「……ありがとう。」

一人、ルークはつぶやいた。

翌朝、ルーク達は国王から長い謝礼の言葉と謝礼金を貰ったが、ランクに再び会うことはできなかった。

「まったく最後ぐらい顔を合わせたっていいと思うんだけどな。」

「仕方ないだろ。私達とランクの関係は終わったんだから。」

シグラのぼやきに適当に答え、門をくぐるうとすると、

「おい、止まれ。ここは王族のみが通れる門だ。お前たちはそっこの細道から行け。」

門番が指差したのは別の門に続く脇道だった。

「おいおい、いくらなんでもそれは無いだろ。」

「良いじゃないか。こっちの道の方が私は好きだ。」

そう言つとルークは言われた通り、細い脇道に入って行ってしまった。

「まったく。」

シグラとサガル師も一緒に付いてきた。

「ルーク」

聞き覚えのある声

「ほら、私の言った通り。」

三人の前に表れたのはランクとハランだった。

「やっぱり、ここを通されると思った。」

「馬鹿だな、こんなところで会ったら、別れるのが辛くなるだけだろ。」

「聞きたいことがあって。」

「聞きたいこと?」

「うん。シユロ王国はどうなっちゃうんだろうって。」

ランクの目は真剣だ。

「敗者をどうするのかは勝者が決めることだ。」

ルークはきつぱりと答えた。

「この戦いの勝者はお前だ、ランク。お前が決めればいい。」

「でも……。」

「弱気になるな！民の生活を知っている国王は、必ず良い国王になれる。私はそう信じている。」

「ルーク……。また会えるかな。」

「私は自分に未来を考えたことが無い。こんな事をやってたらいつ死んでもおかしくないからな。でも、」

「でも？」

「もし、運命がそうなっているのならまた会えるかもな。」

「また会えるて言ったんだよ。」

シグラが簡単に訳すとやっと意味がわかった。

「じゃあな。王子様。」

「待って！」

ルークが門をくぐるうとするのをランクは呼び止めた。

「最後はランクって言ってよ。」

その言葉で振り返る

「さようなら、ランク。きっと良い王になれるぞ。」

それだけ言うとルークは飛び立っていった。

ガレンとカトラルの国境に位置する岩山にルークが恩師としてきたカイの墓がある。そこにルークは降り立った。

「カイ、あの時の事を覚えていますか。」

石を積んだだけの墓に語りかける。

「私はあの時立てた誓いを、ずっと戒めとしてきました。貴方を殺したのは自分だとばかり考えていた。でもそれはただの自分勝手な偏見でした。」

ルークは首に掛かっている飾りの紐を切ると石の上へ置いた。

「これは貴方に返します。大丈夫です、私にもやっとな仲間を見つけられましたから。だから私はすべてが始まったカトラルに戻ります。そこからまた歩み始めることにします。」

ルークは羽を大きく広げ飛び出した。次の行先は砂漠の国、カトラル王国。すべてが始まった国だ。

**最終話 新たなる旅路へ（後書き）**

話はカトラル王国へ続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4975i/>

---

神を呼ぶポケモン

2010年12月10日17時06分発行